

## 夫婦の戦争体験

山口 愛子

### (夫の出征と帰還)

私は昭和十八年十月に男子を出産し、夫は十九年十月に出征しました。二十九才くらいだったでしょうか。夫は生命保険をかけてくれていました。陸軍で北支、今の中国へ行きました。最初は、兵站といって料理を作る係だったから、送ってきた写真でも小太りでした。もともと、体は丈夫だったけど、前線に行くようになってから、食べるものが厳しいので、弱くなっちゃって、肺炎やったり盲腸やったりしたみたいです。昭和二十二年の二月頃引揚船で、骨と皮になって帰って来ました。担架に乗って来たって言っていました。帰る際に戦友の一人は、船の中で亡くなり、一人は船が着いた時に、一緒に相模原の陸軍病院に行ったのですが、結局亡くなってしまう、夫だけ助かったの。

### (子供と一緒に疎開)

残された私たちは、空襲で焼夷弾が落ちて来て、真っ暗な中を逃げて歩きましたよ、ずいぶん、死んだんですよ。前は

家がびっしりあったけど、ずっと焼けちゃって、それと強制疎開で建っている家を壊すわけよ、間引きするの。空襲で焼けると軒並みやられちゃうから立派な家もみんな壊してしましました。壊した木を拾ってきて、炊事に使いましたね(笑)。空襲になると青山墓地に逃げました。その後は、私たちは疎開しちゃうっていなかったから、直接は見ないけど、うちの一角だけ残ったのよ、あとはみんな焼かれちゃった。大通りの所、ずっとみんなやられたんです。結婚して間もなく、子どもが十八年十月に一人生まれて、空襲が激しくなってから、大田区大森の実家に乳幼児疎開しました。でもそこへ行っても京浜工業地帯で狙われるじゃない、大森で大空襲にあって、怖くなって石川県金沢市の姉の所に昭和十九年の六月十三日に再疎開しました。丸二年いて、戦後昭和二十一年六月十三日に戻りました。福井や富山が空襲にあったので次は金沢だと言われたのね。その晩に、警戒警報が鳴って、田んぼの方へ逃げたんですよ、でも金沢だけはやられなかったの、残しちゃったのね。金沢市は文化都市なのでアメリカが残したという話でした。

### (終戦後の暮らし)

配給は足りないのですが、姉が土地の人間なのでけっこう物が買えましたね。でもジャガイモばかりだったこともあ

ります。金沢でも雑炊食堂なんかありましたよ。

でもね、終戦で私が一番嬉しかったことは、電灯がついたことですね（笑）。電灯つけられると思うと、嬉しくてね。電灯をつけたくても、戦時中は警戒警報が鳴ったらつけられないでしょう。戦争は終わったと実感しました。

夫は十九年十年に出征、二十二年三月に復員しました。体を壊していて相模原陸軍病院に半年入院していました。



毎日新聞

## 第二部（インタビュー・空襲）

### サイレンの音で体が震えた

山本 信俊

（焼け死んだ人は黒コゲじゃない）

私が空襲にあったのは、山口県の下関です。空襲になると言うので、皆疎開しました。そうしたら、ニュースで、下関が焼夷弾の攻撃を受けたと聞いて、家を見に帰りました。その晩、焼夷弾がいっぱい落ちて来て、妹と私のお母さんと、手をつないで、布団を水につけて頭にかぶって防空壕に行きました。でも、防空壕がいっぱい入れないんです。その防空壕にいた人は、皆焼け死んだそうです。いっぱい焼夷弾が落ちて来て、周りの家は燃えるし、目の前でいっぱい人が焼けて、大変でした。焼けた人は、完全に焼けていませんから、真っ黒じゃなくて、ブルーでね、腫れ上がって、血が出ていました。それまでは、飛行機が来て空襲警報のサイレンが鳴ると、学校から皆一緒にグループになって帰れるから、サイレンが嬉しかったんです。授業が終わりですから。怖いもの知らなかったんですね。恐いもの知らずだったんですね。ところが、その焼夷弾攻撃を受けた次の日から、サイレンが鳴ると、怖くて体が震えましたね。

（終戦で空襲が無いのが嬉しかった）

戦争が終わった時は、小学校四年生でした。焼けて死んだ人をいっぱい見ましたから、よく生き残ったと思いました。一番嬉しかったのは、大人は、日本が負けたと言っていましたけど、子供はもう空襲がなくて爆弾が落ちてこない、それが一番嬉しかったですね。戦後の貧困は、食べる物がなかったですね。学校では、運動場に穴掘ってお芋を植えました。ですから、運動会も、できませんでした。遠足は、山に行つて蓬（よもぎ）を採ってきて、その蓬をパンの中に入れて、学校給食でした。パンだって、今みたいなふんわりしたパンじゃなくて、一日置いておいたら、硬くなってぶつけたら怪我をするようなパンでした。それから、機雷（船に対しての海に浮く爆弾）で沈んだ船のお米を引揚げて、食べました。もう臭くてたまりません。でもそれを食べました。

第二部（インタビュー・疎開）

戦争で解決は出来ない

平和は理解し合うことから

足立 勝弘

（戦時下に自給自足）

今の子供たちにとっては夢物語ですよ。生まれたのは、港区の日赤通りで、親父が店をやっていました。空襲が激しくなり、愛知県の豊川市に縁故疎開で行きました。豊川には海軍の軍事物資を生産する工場があり、アメリカの飛行機、グラマンが飛んできました。低空飛行だったので、飛行士の顔までよく見え真昼の空が真黒になりました。

食べ物には自給自足、自分で畑を作るのです。あの辺の山は、中腹なら使つて良いよとの許可を得て開墾からやりました。木を切り、根っこを掘り出し、石をふるい整地して、ジャガイモや麦を植えました。親父以下兄弟五人が、人糞（じんぷん・肥料として使う人の排泄物）の肥料を運び、まいて畑仕事をしました。その時は辛かったです、良い体験だったと思います。その時の苦勞があつて今日があると思います。母は胸を患い体の具合が悪く、仕事は出来ませんでした。

終戦時、私は国民学校の三年生で九才でした。よくわかり

ませんでした。その日大事な話があるというので、ラジオを一生懸命聞きました。一番嬉しかったことは、今夜から電気がつけられるということでした。灯火管制が無くなることでした。戦後、薬も栄養食もなく、昭和二十一年に母は亡くなりました。



毎日新聞

第二部 (インタビュー・疎開)

家を焼かれて家族で疎開

行田 重男

戦災で家も焼かれ、中学二年の時父親の故郷山梨県の親戚の所に着の身着のまま疎開しました。当時の転校は戦災の罹災証明をもらって、田舎へ行ったんですね。罹災者優先ですからね、入手しにくい切符も何も、手に入りました。罹災証明っていうのありますから。証明書書いてもらわないと動けなかったです。電車の中は、罹災者ばかりでした。格好を見れば罹災者って判りましたね。

甲府でも戦災にありました。寒い時に、上空から急降下で降りてきて機銃掃射です。パンパンパンって、撃ってくるんですよ。逃げて防空壕に飛び込んだこともあります。艦載機って低空飛行での機銃掃射ですから、下から顔が見えるんですよ、皮の飛行帽を被っているのまで、見えました。

(甲府で終戦)

昭和二十年八月十五日、父の故郷の山梨で終戦を迎えました。終戦の日、炎天下の中生徒何人かでリヤカーを引いて、駅まで岩塩を運んでいました。帰りに、畑のトマトをもぎな

がら岩塩をつけて、食べながら帰ってきた思い出がありますよ（笑）。それで学校へ着いたら、大人も皆混じって校庭で玉音放送を聞いていました。玉音放送は、繰り返し、繰り返しやっていました。戦争に負けたっていうのを、そこで知りました。その日は本当に暑い日でした。

### （平和への思い）

私の孫が来るたびに、戦争は良くないよというんですよ。戦争が人の殺し合いで良くないといつても、真意を感じてもらえないかも知れませんがね。だけれども戦争は駄目だっていることは、学んで欲しいのです。中学二年の孫が「おじちゃん、戦争っていうのは大変だった？」と聞いてきますから、「大変だったなんてもんじゃないよ。多くの人が死んで悲惨なものだから、戦争はいけない」って、色々話しますけれど、実感はないでしょうね、なかなか想いは伝わらないものです。

## 第二部（インタビュー・疎開）

### 戦争体験を語り継ぐ責任が

伊藤 興二

### （戦時下の幼児体験）

私は昭和十五年、東京新宿の病院で生まれまして、代々木上原の近くに住んでいました。父親が役人で、昭和十八年に仕事で司政官としてシンガポールに行きました。それで、母と私たちは母の田舎の山形県に疎開しました。僕が四才くらいの時ですから、疎開先での記憶はほとんどありません。昭和二十年に、母の里から更に疎開と言いますか避難をしまして、そこでの記憶が断片的にあります。敵の偵察機が来たことや、夜電灯に布を被せて光が外に出ないようにしたこととか、戦況等のラジオを聴いていたこととかですね。それから、疎開先で兄貴が庭に出ていたら、飛行機が飛んで来て機銃掃射にあったこともありました。昭和二十二年になって、父親がシンガポールから帰って来て役所に復職し、私たちも東京に帰って来ました。父親はシンガポールで、しばらく捕虜になっていましたので、すぐには帰れなかったのです。

(衝撃的なことは子供の記憶にも)

小学校、中学校と高田馬場におりまして、早稲田の近くに住んでいました。中学時代の友だちが僕に話してくれたのはですね、戦争の時に空襲で焼け出されて、神田川沿いを裸足で逃げたそうです。そうして、その途中で子どもの死体に出あったり、死んでいる子どもの鼻から、うじ虫がはい出てきた話を聞きました。そういう、死ぬか生きるかというような経験をした友人は、小さくても鮮明な記憶を持っていましたね。例えば、原爆にしてもそうですね。信じられないような経験をしたというのは、小さくても非常に鮮明に覚えているんだろうなあと思います。

(平和への思い)

戦争は二度としないように、我々が戦争を知らない世代に伝えていくというか、引き継いでいかなければと強く思いますね。私たちは、そういう役目を果たして行きたいと思っています。

第二部 (インタビュー・疎開)

## 縁故疎開そして終戦

神先 操子

(強制疎開で田舎に)

新橋で、強制(建物)疎開にあいまして、子供を三人連れて夫の田舎、新潟県北蒲原郡へ疎開したんです。それが最初はよかったのですが、東京があっちこっち空襲にあって、その人たちがたくさん疎開に来て、東京ばかりいい思いしてと言われて、だんだん私たち田舎の家のお米やなんかも頂けなくなりました。配給で親子四人、その後、おばあちゃんも新橋で戦災にあって、一人で田舎に訪ねて来たのです。私は都会育ちで農業の経験がありませんでしたけど、稲刈りや稲をかついで手伝ったり、みのを着たりしてけっこう苦労しましたね。それと子どもたちが小さかったですからね、それでも村の子供たちと仲良く毎日駆けめぐるって遊んでおりました。見れば田舎の子と比べると分かれますからね。長男の小学校入学の前に先生が面接したときも、親は別の場所で待機させられ部屋には入れないのですが、「お前さん、東京もんだらう」

って先生に言われていたのが聞こえてきました。

田舎にいと空襲がないため、電気を暗くする必要もありませんでした。私たちなんていいほうだったと思います。疎開した人は大勢いました。その中、子どもは疎開してきた夫の兄の子供とよく遊んでいましたね。牛の面倒を見たりね。

#### （夫の帰国、東京へ）

夫は南方へ行っていて、いなかったんです。兵隊じゃないです。今のベトナム、昔は仏領インドシナって言っていました。大使の従者で、食事や宴会の係として、行っていました。昭和二十一年の五月に、帰って来ました。その年の暮れですかね。当時、東京への転入がなかなか出来なかったんです。夫は帰って来てからはマッカーサーの横田基地に、料理人としてお勤めしていました。それで、マッカーサーのハンコが頂けて、東京へ転入が出来ました。当時は、普通の人の転入は制限があり、なかなか難しい時代でした。とにかく、子どもに食べさせるのが精一杯でしたね。

#### （若い人へのメッセージ）

若い人が、物を粗末にすることが氣になりますね。何でも、

最後まで使わないで捨ててしまうでしょう。私は今でも石鹼が小さくなると新しい石鹼の上にはりつけて使っています。



学童疎開

食糧・衣料・虱の思い出

高橋 麗子

(学童疎開で栄養失調)

小学校六年の時、江戸川区から山形へ、リュックサック一つで学童疎開しました。最上川に行つて、川で遊んだような記憶があります。二年生の弟がいましたけど、弟は栄養失調で、ひよろひよろになって死ぬ寸前で帰してもらいました。疎開先で、弟とは少し離れた所にいましたから、自分よりも弟の方が心配で大変辛い思いをしましたね。もう凄かったですよ。それで私が見るに見かねて、お昼でも夜でも、少しでも食べ物を持って行つてね。でも、そういうことをしちや駄目だつて言うんですよ。空襲直前に小岩に帰つて来たんですよ。もう帰りは汽車で大変でしたよ。もう満員でしょ、乗るのはドアからじゃなくて、窓からでした。帰ってくれば爆弾落ちて、もう空が真っ赤になってね。今度は小岩だつて、言っている時に終戦になりました。

(戦争体験者の三大キツイ)

衣類は、継ぎはぎして着たものですよ。今ではもう考えられないですがね。未だに、継ぎをすると娘に怒られるんですよ(笑)。頭と衣類のこういう縫い目に、虱(しらみ)が湧いて、そりゃあ酷かったです。痒くつて、ぼろぼろ、ぼろぼろ湧いてきました。それで、DDTを撒かれてしまいました。そうすると、いくらか楽になるんですよ。それと、蚊が凄かったので蚊帳を吊つて、蚊帳の中で勉強したものです。やっぱり食料が一番大変でしたね。食べるものがなくなつて

ねえ。さつま芋の根つことか、それから、とうもろこしの粉を焼いて食べていましたよ。まずい。パンなんか配給、コッパンなんかこんなのが一つ。さつま芋にご飯粒が一つ二つ付いて、それでご飯ですものね。ちようど育ち盛りでしょ。衣料品、食料、虱が、戦争体験者の“三大キツイ”です。

(平和への思い)

体験しなきゃ解らないと思いますよ。だから、私はいつも言うんですけど、本当に物が一度無くなつてみたら、解ることがあると思うんです。孫の時代にも、こういう戦争はしないで欲しい、戦争は、人が止めようと思えば止められますよね。

## 家の周辺は全滅

滝田 静枝

### (空襲の臭い)

私は弟と二人で秋田に縁故疎開していました。残った家族は京王線の幡ヶ谷で空襲にありました。あの辺り一帯はすごかったですね、のき並みに焼けました。母たちはリヤカーに荷物を積んで、水道道路の方へ逃げたそうです。ところがリヤカーが邪魔になり一ヶ月前に亡くなった兄のお骨だけ持って逃げました。いじめに耐えられず、東京に帰った弟は妹と防空壕なら安全だろうと命からがら逃げたら焼夷弾がそこに落ちて来たのです。それでも助かりました。父だけは、自分の家が壊れるまで残っていたそうです。翌朝、弟の目は真っ赤で見えないくらいになり、防空頭巾は火の粉で穴だらけだったと言っていました。新宿は建っている高い建物はデパートくらいで、そこから幡ヶ谷の自宅にたどり着くまで臭いが強かったです。ニシンの焼いたような臭いというか人の焦げた臭いなのでしょうね。坂の所に貯水池があったのですがそこの中でもずいぶん亡くなっていました。あのあたりは

両隣も被災していて周辺全部が焼け野原になっていました。

その後、兄のお骨だけ持って家族三人が秋田に疎開して来ました。そのお骨箱だって火の粉で焼けて穴だらけですよ。下駄の鼻緒は電気のコードのようなものを巻いて履き、やつとの思いで逃げてきたという感じでしたね。

### (秋田での疎開生活)

私は二年前くらいに秋田に疎開していましたので兄妹五人になりました。その年は大雪で雪のため二階から外へ降りるんです。玄関から雪の階段作って学校に通ったんです。母の実家は農家でした。戦争で男の手がないものですから、雪の中でも数キロも先の方まで供出米を運ぶ仕事のお手伝いをしました。雪の道は慣れないとすぐ足が滑ってしまいましたね。田舎にもいじめっ子はいましたね。私もよくいじめられました(笑)。疎開者、疎開者っていじめられまして、弟は石をぶつけられたりしたみたいです。朝行くと、黒板にいじめのいたずら書きがありました。近所には麴町から疎開して来た子どもたちがお寺に泊まっていました。お墓のお供え物を食べたりしていました。また少しでも成績が良いと、ねたみと言うのかしら、いじめられました。でも、母の実家は、疎開中すごく良くしてくれました。そのお陰で、食べる物に

は困らなかったです。贅沢は出来ませんが、学校へ行くのに大根の葉っぱを刻んで混ぜご飯にして、みんなの手前ぜいたくは出来ませんので、ほんの少しおかずと梅干しを入れてくれました。

市内ではなく横手からちよつと奥へ入った田んぼの中の田舎でしたが、飛行機が来て焼夷弾を落として行きました。それで逃げて、危ないって小屋の中に入ったこともあります。

#### （終戦で東京へ）

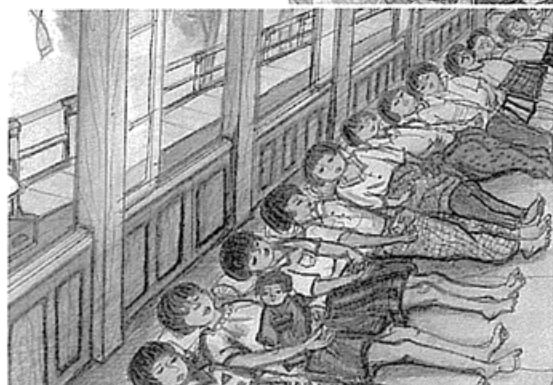
中学の一学期ぐらいに終戦で東京に戻りました。帰りの汽車の中は新聞紙をしいて座り乗ればいいという感じでした。父親は焼け出されて、バラックを建てて住んでいました。皆さん食べ物に不自由したみたいですけど、私の家は不自由がなかったんですよ。配給と統制で自由に運送できない時代でしたから、味噌漬の間にお米を入れるなど工夫をして秋田からお米を送ってくれたのです。食事をする時はそつと障子を閉めて食べるんですよ。お米のない時代でしたからね、おこげでも喜んで持って帰られる人もいました。

私の夫は深川にいて、強制疎開で茨城に行き、芋ばかりの生活だったと言っていました。あの当時は、みんな縁故を頼って行ったでしょう。縁故先がない人はお寺とかさうい

う所へ行きましたものね。みなさん辛い思いをしたみたいですよ。



小島 義一 画



小島 義一 画

## 学童疎開の思い出

匿名希望

私は、昭和十九年に現在特別養護老人ホームになっている氷川小学校（国民学校）に入學しました。当時私は四人兄弟で、二歳上の長女、私と下に二人いました。もう一人は終戦後の生まれです。今の山王下、うちの近所の赤坂二丁目は、元々女性の多い花柳界（かりゆうかい）でした。普段から男手が少ないうえに、皆兵隊に行つて本当に女ばかりの町になっていました。そんな時、父が朝鮮から病気で帰つて来ていました。空襲が激しくなる頃です。空襲があると、母と父が、下の二人を各々おぶつて、爆弾と焼夷弾の中を逃げ回つたそうです。

だんだん戦争が激しくなり、皆疎開をどんどんしていましたが、いろいろな事情で赤坂に残っている子どもたちがいました。それで危ないということで、行く所のない子どもが、学童疎開をすることになりました。うちも縁故先の田舎がないものですから行くことになりました。最初のころの学童疎開は、三年生から上の子だけでした。空襲は激しくなるにつ

れ、お姉さんやお兄さんがいる人は、一年生でも二年生でも一緒に行つていいということで、南武線の矢川の南養寺（現・国立市）というお寺に疎開することになりました。それが何月何日なのかよく憶えていませんが、三年生の姉と一緒に学童疎開となりました。氷川国民学校からは、先生が数人ついて行きました。子供は多かったですよ。何十人っていう人数です。

男の先生がご飯のお米とか食材を手に入れるのに走り回っていましたし、他の先生たちはみんな忙しくしていました。上の学年の人たちは、本堂の周りの回廊で横に長い机を並べて、教科書で勉強していました。私たち下級生は、先生が用事で外出のため勉強せずに毎日遊んでいましたね。昼間はそのままとして遊ぶ（笑）。遊び道具といつても、飴の包んであった紙とかぬり絵とか、ほんとつまらない物です。あのあたりは竹やぶがあつたり、野原にいっぱい花が咲いていたり、菜の花を摘んでおままごとのお料理を作つたり、よく遊んでいました。そして、毎日夕方になると寮母さんに連れられて、すぐ側の多摩川まで散歩に行つて来る、そんな毎日でした。

立川の飛行場や軍の施設が近くだったので空襲もけっこうありました。夜空襲警報が鳴りますと、床の高い本堂からまあ降りるといふよりも、姉と二人で手をつないで落ちるとい

う感じで本堂の階段を駆けおりました。暗くて、階段が見えませんが。「あっちだ」「こっちだ」と言いあっているうちに二人で手をつないで、上から転げ落ちたこともありました。防空壕は、お寺の竹やぶの中です。防空壕といっても土をただ掘っただけで、木で枠を作るとかの上等な防空壕ではなく、中は二ヶ所に出入口があるU字形のトンネルで、そこへ、みんな放り込まれるわけです。上は竹やぶ、周りは赤土みたいな湿った土、そして、こおろぎがびっしりその周りについていまして、入ると人の気配を感じてみんなあわてて飛び散るわけです。ピョンピョン飛んでくるのが分かります。ゴキブリみたいな感じ(笑)。本当に恐くて気持が悪かったです。今だったらちよつとね。ある日の夜、東京の方角を寮母さんが教えてくれて、「今東京が燃えている」と言っていました。とにかく空が真っ赤で。五年生とか、六年生の方は赤坂にいる両親や兄弟のことが心配で、焼ける赤い空を見ながら、泣いていました。

食事は、朝どんぶりにご飯、たくあんが二切れ乗って、あとはお味噌汁。それだけでおかずはなし。それを朝昼晩、でも朝昼晩食べられただけでもありがたかったです。味噌汁はねぎだけとか。お豆腐なんか無かったですからね、ねぎが多かったですよ。

そして、親が面会に来る日があります。その時はお菓子などを置いていってくれます。少ない量ですから隠れて食べました。それがばれてしまうと、後でみんなからずるいといじめられました。けっこういじめはありませんね。やはり子ども同士の社会で、大人の目が届かないところではけっこう辛かったです。いじめられた人は気の毒でしたね。そういう生活が二ヶ月か三ヶ月くらい続きました。五月に赤坂の空襲があり、そのあと母に呼び戻されました。何しろ小さい頃の記憶ですから、いつ行つて戻ったか正確な記憶はありません。

#### (五月の空襲)

港区の空襲、焼け出された五月二十五日は疎開していきまして、実際の話は父や母、周りの人から聞いた話です。焼夷弾で町はどんどん焼け、万が一の時には赤坂見附に逃げろという指示でした。早めに逃げた人はみんな赤坂見附に逃げたのです。父は町内会の班長でしたので、責任強く最後まで残り、逃げ遅れてしまったそうです。そして赤坂見附の方がものすごい火の手で、とても逃げられない状況となりお母さんの手を引っ張り、はぐれそうになりながら「馬鹿野郎」とか、「何してんだ」とか、「さっさとしろ」とか怒号の中、芝の方に逃げたようです。芝は赤坂より早く焼けたようで、火の手が上

がつていなかったと父は言っていました。とっさの判断力ですかね。火が収まり、我が家のあった今の赤坂二丁目の辺りに戻って来ると、もう焼け野原で、赤坂見附が大変なことになるってわけです。人の死体が山になっていて、私の祖父と祖父が見つかりません。一生懸命搜すと、祖父は道路の歩道にあった防空壕で焼夷弾の直撃を受け、木っ端微塵で死んでいたそうです。防空頭巾のほんのちよつとの切れっ端が見つかったので、祖父だと分かったそうです。叔父さんは一人で逃げたらしく、赤坂見附から日比谷高校に上っていく細い坂でうずくまり死んでいたそうです。焼けなかったものから、住所とか名前とかを防空頭巾などに書いてあったので身元がわかりました。遺体は東京都にお願いして焼いてもらったそうです。焼け野原になって、布団も何もなくなり、母は私たちを疎開先に迎えに来たわけです。本当に大人の人は大変だったと思います。

甲州街道で四谷まで帰って来ました。四谷は高台で、赤坂の方は少し低かったので、焼け野原が一面に見えてきたのです。お風呂屋さんやうちのすぐ近くにあったので探すと、その煙突が真つ二つに折れているのが見えました。それでうち場所が判ったのです。もう住むところが、なくなっていました。

家族は、田町通りの方に仮住まいしていたようです。鉄の棒を柱にし、トタンは焼野原から拾って屋根にして、雨だけしのぐという家でした。だけど雨が降ると水が溜まっちゃうわけです（笑）。それで焼け残った隣の家に駆け込んで、助けもらったこともあったそうです。知人に手伝ってもらい掘っ立て小屋を建てたそうです。当時大工の経験がないですから、どうやって建てたかって今でも話の種なのです。知人は三味線を作る職人さんでしたので、釘を使わないで木を組む技術があり、その技術を応用して、掘っ立て小屋を建ててくれたようです。そこに結局住むことになりました。

新学期が忘れましたが、氷川小学校に戻りました。学校も戦災を受けましたが授業はやっていました。空襲警報が鳴ると白い壁の地下室に駆け込んで、解除になるまで親が毎日用意したお菓子、さつま芋で作ったお饅頭とか、色んな持っていたものを食べ、じつと解除までがまんしました。終戦の八月まで続けました。学校は一年生に二人とか二年生に一人とか、何年生はいないとか、そういう状態でした。それで一つの教室に全学年全員の大学級です。授業がやりにくいので、校庭の防空壕に腰掛けて授業を受けました。もちろん給食も無いし、お昼になったらうちに帰ってさつま芋やかぼちやを食べ、また戻って勉強する日々でした。しばらくしてか



毎日新聞

からお弁当を持って来る子もぼちぼち現れました。そういう子はお金持ちの家の子でしたね（笑）。だけどまだその当時は、大半が貧乏人でお弁当を持って行けなかった。もし持って行けてもおかずがみつともなくて、人から馬鹿にされることも、けっこうあったみたい。だんだんみんなが戻って来まして、教室の数も足りなくなり戦後は地下室も教室として使用していました。

## 第二部（インタビュー・疎開）

### 学童集団疎開の記憶

藤井 悠紀子

#### （あの戦争は何故）

昭和十年三月三十一日生まれ。七十二歳になりました。おりに触れて脳裏を横切るのは、当時、大東亜戦争とよばれたアジア・太平洋戦争の記憶です。

あの戦争は、なぜ起きたのか。なぜ、止められなかったのか。いまだに考え続けております。

昭和十一年、軍部によるクーデター、二・二六事件が起きています。二・二六事件は日本の国が戦時体制へ歩き出した歴史の転換点ではなかったのか。

十二年、支那事変勃発。十三年、国家総動員法公布。十四年、国民精神総動員委員会の設置。十五年、日・独・伊三国同盟の締結。日比谷公会堂で祝う会が催され、私たち幼稚園児は、壇上に並び合唱しました。「日本、ドイツ、イタリアの

お国は仲良し、うれしいな・・・」

昭和十六年十二月八日、アメリカとの戦争が突如として勃発。国民学校一年生でした。開戦のあと、破竹の勢いがつづいた陸海軍は、十八年に入ると、負けに転じます。十九年七月、サイパン島が占領され、B 29爆撃機の本土侵入を容易にしました。

次代を担う学童の生命を空襲の惨禍から護る学童疎開が、国家の政策としてとりあげられ、閣議決定されました。東京都は七月十八日、十九日に学童集団疎開を勧める父兄会を開催。ほとんど強制的に決断が求められたのです。

私が通った江戸川区第二松江国民学校の疎開先は、山形県（現）鶴岡市湯田川温泉に決まり、昭和十九年八月十九日、学童の第一陣が出発しました。

#### （祖母と那古船形へ疎開）

昭和十九年九月から、翌年十月までの一ケ年間に、千葉県、山形県、栃木県を転々とした疎開の体験が私の戦争体験です。千葉県館山市那古船形。曾祖母が晩年を過ごした家に、祖母と二人で住みました。二学期の始業に合わせて、地元の国民

学校四年生に編入。体育の時間でなぎなたを振りましたが、それまでとは変わらない日常でした。

祖母は暗いうちに起き出し、朝ごはんの支度をしてくれました。薪で焚いたご飯でした。あたたかい味噌汁、あたたかいご飯のありがたさを、あとになって思いました。おだやかな日々は、突然、打ちきられました。ちょうど、始まりが性急であつたように・・・。

隣接する館山には、館山航空隊の基地が設けられ、房総半島上空は敵機の東京へのルート。危険が迫っていたのです。三月十日、下町大空襲あと、「山形へ疎開するよう」父に告げられました。

#### （鶴岡市湯田川温泉へ集団疎開）

三月二十八日、第三次学童集団疎開の十数名と羽前水沢駅に下車。深く積もった雪道を六キロ歩きました。

集団疎開の生活でつらかったのは、何といっても空腹です。いつもお腹を空かしていました。どんぶり一杯のご飯は、おかわりができません。薄い味噌汁。砂糖、醤油、味のない塩茹でのスケソウダラがでることがありました。学童たちには、特別に砂糖の配給がありましたが、子どもたちに与えられず、

大人たちの口に入っていました。施設とした旅館が小豆を、教師が砂糖を提供、お汁粉会を催したのです。

嫌な思ひ出は、虱（しらみ）。下着の縫い目に並んだ虱のタマゴをつぶすのが寝る前の儀式。白く光ったタマゴを、親指の爪で「ピチュン、ピチュン」と。翌朝、新しいタマゴが発生するしぶとい虱です。

雪が消えると、戸外での勤労作業が始まります。松の根を運ぶ作業は、重労働。苛酷でした。飛行機の代替燃料に、松根油が使われました。松の根の重いかたまりをモッコに入れ、前後に一人づつ、二人一組で担ぐのです。人夫の仕事を、十歳の子どもが、です。

空腹も、虱も、勤労作業もつらい。しかし、施設での集団生活自体、私にとって苦痛でした。プライバシーも自由もありません。生活のすべてが管理されているのです。食事、睡眠、勉強（作業）、休憩。同じことを、同じ場所で、みんな一緒にやるよう要求されます。寮長は六年生の桜井君でした。お母さんが（空襲）で亡くなったとき、彼はふとんを積み上げた押入れに頭を突っ込み泣いていました。

ここから抜け出せないものか。つらい状況を両親に伝えようと考えました。しかし、手紙は教師の検閲印が必要です。

ネガティブな内容の文面が通るわけありません。思い余って、村はずれの郵便局まで歩き、投函してみました。手紙は着きました。

六月上旬、父が迎えにきてくれました。短いけれど長かった二ヵ月半でした。

#### （栃木県（現）矢板市宇塩田に疎開）

東北本線、矢板駅から北へ八キロ。徒歩で二時間。塩田は、麗峰、高原山の裾にひろがる山間の村でした。四百メートルほどの間隔で、田、畠の中に点在する家。家々をめぐり蛇行する川。音をたてて流れる冷たく澄んだ川の水は、生活用水にも使われました。

大空襲のあと、農家の一室をようやく借りることができました。母、妹、第二人の四人に、私が加わりました。過疎地の村では、警戒警報も空襲警報も鳴らなかった。

昭和二十年八月十五日、玉音放送を村長さん宅のラジオでききました。陛下のお言葉は、よくわからなかった。しかしまわりの人々の様子から察することができました。「戦争は終わった。敗けてよかった」はっとしました。

息苦しい集団生活のとき、「こんな生活は嫌だ。早く終わってほしい」心の中でつぶやいた、あのときの思いが叶ったのです。

第二部（インタビュー・疎開）

美味しかった乾燥芋の記憶

丸山内 一郎

（東京から栃木へ疎開）

当時私はまだ学校に行っていない時です。中目黒のあたりで空襲警報が鳴り爆弾を落とされて、避難して行くのはわずかに覚えています。目黒川ありますよね、あれをちよつと上流に行った所に、親父の仕事場の関係で住んでいたらしいのです。それで空襲が激しくなつて、栃木県の国分寺村に引越しました。その時の分校があつて、そこに小学一年から三年生まで、そのあと四年生からは小金井市内の本校へ川を渡つたりして一里以上歩いていました。大雨のときは、川が渡れずに怖い思いをしながら五年までいました。その時に、いじめっ子からかばってくれた先生と、いまだに年賀状のやりとりをしています。まあ、疎開っ子ということで、いじめられて川に突き飛ばされた記憶もありますね。小学校五年の三学期に東京に戻り、恵比寿の小学校を出て地元が港区だったので、朝日中学校に行きました。

疎開していて、食べ物には不自由はなかったです。今のさ

つま芋の乾燥芋は、おいしくありません。あの頃は自然の中で干してあって、食べると最高においしい、その記憶だけはありますね（笑）。



小島 義一 画

第二部（インタビュー・疎開）

疎開先で慣れない畑仕事

矢袋 治子

（五年間の疎開生活）

私は、昭和十七年に結婚しました。当時は結婚式を挙げるのにも、お米を持っていけないと挙げられませんでした。空襲が激しくなり、夫は品川区、旗の台の会社の寮に残り、子供と私は福井県の小浜に五年間疎開しました。東京では、お米の配給券でしたけど福井では砂糖でした。当時、手ぬぐい一本と、お米一升が交換出来ました。お金より、物が貴重な時代でしたので。漁師はとれた魚とお米を交換していました。私はそれまでお嬢様育ちでハンカチ一枚も洗ったことがなかったので疎開先での生活は、初めてのことがかりで慣れるのに大変でした。でも、疎開生活の苦労があったお陰で、強く生きられるようになりました。朝五時に起きて、子供をむしるの上に寝かせ、一日中慣れない畑仕事をしていました。畑に肥やしを撒くのに、私と二歳の子供だけの肥やしでは一反の供出畑には到底足りず、肥やしを貰いに行きました。その苦労が今でもはつきり思い出されます。臭くて何回も運ぶの

が嫌だったので、桶にいったいいくんで回数を減らそうとすれば、重い上にくさくて、その途中でピチャピチャ跳ねて肩の皮がむけて痛むのです。農家の人に「仕事を知らないね」といわれたことを覚えています。



小島 義一 画

第二部（インタビュー・疎開）

満州で働き、終戦

遊佐 敏子

（選抜後満州へ）

私は女学校を出てすぐ、東京の九段会館で選抜があり、二十人くらいで満州に行きました。軍人会館だとかいろいろな所に配属になりまして、私は新京（吉林省・長春、旧満州国の首都で新京と命名）の関東軍（満州に駐留した天皇直隸の日本軍、一万二千余）司令部で書記になりました。関東軍司令部はちゃんと宿舎もありましたし、戦闘員じゃないですから普通の生活です。事務員として、各命令系統のタイプライターとか、部隊へ司令を出す時の指令書を作るとか、そういうお仕事をしていました。軍人会館に行った方は、満州国の高官と関東軍が宴会をする時のお手伝いをしたり、私たちも鄭総理（満州国國務総理・首相）が出席する宴会などは、お手伝いに行きました。関東軍司令部では作戦に従って奥地から全部の部隊長が集まって来まして、作戦に従った会議があるわけです。会議がひとつ終わると宴会があるわけです。その時に満州国の高官が来ました。日本の宴会と同じです。宴

会とか会館に納める品物は特別の物で、満州国人が多い時には中国式の宴会、そして、日本の高官が多い時には、フランス式とかでしたね。内地（日本）は、もう物が無くなっていたのに満州は、まだ、卵百個単位で買えるくらい物がありませんでした。

満州国は、組織がみんな県庁という、何県何県と分かれています。県庁の長は、現地の人ですが、副官はみんな日本人です。やはり関東軍司令部と、それから政府の方と、二つ重なって命令系統が出ていたと思います。私は割合タイプを打っていましたから、そういう関係はよくわかります。

#### （結婚そして引き揚げ）

終戦直前ぐらいに、ある部隊長と結婚しまして、内蒙古とノモンハンに近い所に行きました。そこから子どもを連れて引き揚げて来ました。終戦と同時に、ソ連が攻めてきまして、それで急ぎよ貨車に乗って、満州国皇帝が疎開（溥儀皇帝が朝鮮に近い通化省臨工県の大栗子）したという所へ三晩も四晩もかかって、石炭貨車の中に隠れて、日本人は全部来まして。そして、約一年抑留生活を過ごしました。日本人は日本人で柵をこしらえまして、その中に全部集まってお金を出し合って、まあ一年食べ続けたわけです。村っていうか、集

団ですね。今の難民の方と同じです。でも開拓団から来た人と違って、軍人の家族だけとか、満鉄の家族だけとか、いろいろグループがありました。あの辺は日本人が工場を造ったり、会社をつくったりして、官舎もこしらえて日本人が開拓してたんですね。侵略じゃないですね。満州は建設です。ほんとに王道楽土（西洋の「霸道」）に対しアジアの政治体制を「王道」とし、満州国皇帝を中心に理想国家を建設すること）とは言わないまでも、鉄道も引いたのも電気を引いたのも日本人ですし、学校を作ったのも日本人です。それで、そのままでの形で敵が来ないようにしていたのですけれども、八路軍（中国共産党の中国人民解放軍、ゲリラ戦を主に担当）が攻めてきたり、いろいろありましたから、やはり坊主になったり大変でした。男性はみんなソ連に連れて行かれましたから、残った女性だけの軍団ですから大変でした。いじめられる、虐待じゃなくて、向こうは物が乏しいですから襲ってくるんですね。それこそ家の柱まで掘るくらいの略奪です。ですから、日本人は一箇所に集まって自衛していたんです。ソ連兵が入ってきた時は、女の人は狩り出されますし、そういうことがいっぱいありますけど、日本人同士で支え合って生きていました。

子どもを背負って、引き揚げて来る前に、八路軍に一時停

戦してもらいまして、それで日本人は帰してもらったんですね。それは終戦後、丁度一年経ってからです。それまでに、半分近く亡くなりました。生活が悪いですからね、それで寒いですからね。歩いたり、戦車壕を降りたり上がったたり、あるいは匪賊（ひぞく、土着の武装集団）に追いかけられたり、荷物を奪われたり、子どもを盗られたり。そうですね、引き揚げる苦労は、どなたも同じで、一ヶ月くらいで大連に着きましたけど、半分死んじゃうような悲惨な引き揚げ状況でした。

中国の里親に感謝しようと言いますが、残っちゃった孤児は、盗られて転売、転売されて残った人もいると思いますので、育ての親に感謝する意味はないと思います。子どもが売られるんです。またお骨壺を大事に持ってきた人が、大事なものだと思われて、それすら狙われました。ですから、満州に未練ありません。せっかく、あれだけ産業を興し農業を教え、学校を作って満州の建設をしましたけど、今は中国が反対にしています。それはまあ、一部そういうこともあったでしょうが、大部分の日本人は、非常に紳士的で悪いことはしていないと思います。みなさんに一生懸命に、それが伝えたくてお話ししました。

## 第二部（インタビュー・疎開）

### 物不足の戦後

吉田 正義

#### （学童疎開で栄養失調）

僕は、栃木県の川治温泉ホテルっていう所に学童の集団疎開をしました。川が流れていて、綺麗な所でしたけど、食べる物が何もなく、朝はご飯の中にさつま芋が入っていて、昼はお芋、夜はお蕎麦とかでした。それで全員栄養失調になりましたね。昭和二十年の三月十七日、僕は東京の神谷町に帰って来ていて空襲で焼け出されました。

集団疎開ではまた栄養失調になるかもしれないと、お袋たちが心配してくれて長野県の諏訪の一つ手前の茅野（ちの）という所に行きました。田舎に帰る時、新橋で降りて見たら、議事堂と虎ノ門の所に小さいビルが残っているくらいで後は全部焼け野原でした。そして上野の駅周辺も全部焼けてしまったね。だから、終戦は茅野で迎えました。天皇陛下のお言葉は、茅野で聞きましたね。ですから空襲の体験はあまりありません。神谷町の農林年金会館（今のパストラル）の所は、昔は大きな森で、そこに逃げた人は助かったらしいですね。

（物が無かった戦後）

終戦後は、新橋の駅の所に闇市が出来て、白いおにぎりが結構売っていましたね。一個幾らで売っていたかなあ？もう、闇市だらけでね、衣類とか色々な物がありました。終戦直後は、タバコの紙を巻く機械が売られていました。落ちているタバコを拾い、紙をほぐして中身を巻くのです。皆さん結構吸っていましたよ。食べ物が無くてね、農家の人が、秋に柿の皮を干すんですよ。それを貰って、皆で皮だけ食べたこともあります。

子供の頭には虱（しらみ）がいて、アメリカのDDTをまいて消えたんですよ。女の子なんて本当に、頭が虱だらけでね。

お袋なんかも、買出しに行つて、この辺だと溝ノ口あたりに行つたんですよ。着る物を持つていつて交換していました。だから、映画じゃないけど、終戦直後の農家の案山子（かし）って、結構豪勢なモーニングを着ていたと（笑）。まあ、そんな時代でした。

第二部（インタビュー・原爆）

炎の中から

松永真喜子・永松立江

上空高く光る機影。今もB29エノラ・ゲイ（機長の母の名）が脳裡に焼きついている。その直後、広島市はアメリカ軍の投下した原爆第一号の実験都市となった。

広島は毛利氏が太田川のデルタの上に築いた城下町で明治になると日本陸軍の基地となり、特に日清戦争時には大本営も置かれた。昭和に入ると第二総軍事司令部つまり西日本陸軍の要地とされるようになる。それに伴い近郊を含め軍需関連の工場数も多く、南部の宇品港は戦場へ人と物資を送り出す役目を負うことになる。加えて三方山に囲まれた地形は、核投下後の効果を知る絶好の場として選ばれたのであった。

そのような所へ三井生命に勤務していた父は、会社設立当初から置かれていた支店へ責任者として赴任、家族も学年の変わり目に遅れて移り住み、丁度四年半の歳月が経った八月六日の朝のことである。

父の会社は、現在世界文化遺産に認定された原爆ドームに

近く、あたり一帯は官公庁企業病院などの並ぶ所にあり、そのすべてが一瞬で崩壊・消失することになった。当時の職場は、応召徴用により若者は激減、更に追い討ちをかけて昭和十八年になると男子の平和産業への雇用が禁止となり、一方戦死者、空襲による災害死もあり女子が欠員補充された中で更に部下を失うこととなった。

八時十五分、炸裂した原爆で（当時の人々はピカドンと呼んだ）既に出社していた人、途上の人、又支社（戦時中の人手不足から全国の支店のもとに五十八箇所支社が設けられた。現三井総務部長萩田晃弘氏提供の社史による）の人も含めどれくらいの犠牲者が出たのか正確なことを私は知らないが、その労苦いかばかりだったかと思う。

父は劫火が落ち着いた頃、爆心地の職場へ責任者として向かうが、その様子を数年経たある日語ってくれた。「神田橋を渡って中心地へと進むにつれて、力尽きて道に倒れた人の姿が現れ出し、程なくして遺体が歩く所もないほど大地を埋め尽くし、遂に避けきれず手を合わせて行くしかなかった。そしていよいよ爆心地近くになった時、バタツとあたり一面すべてが消え失せていた」核の火球が何もかも溶かし蒸発させたのである。父は社屋の跡に立ち、どんな思いだったのだろうか。

六日の我家は、その後押し寄せる怪我人の手当てでたちまち備蓄の薬や包帯、三角巾は底をつき、母の浴衣を裂いて包帯代わりとしたが、大量の怪我人の前ではどうすることもできず、救護所の所在を伝えるだけとなった。重度の火傷を受けた人々の波が続く。両手を斜め前に突き出し、トボトボと無言で歩み行く人。その人は手の先が脱ぎかけた手袋がぶら下がっているかのように皮膚が指先に引っかかって細長く垂れ下がり、着衣は燃え、体は黒く煤けていた。

爆心地からの焰（ほのお）は、突如風向きが変わったことで我が家の焼失は逃れたが、瓦も畳、壁、戸も吹き飛び、残るは柱だけの状況の中で重症の社員を迎え入れた。支店長代理のKさんは肘が大きく裂け歩行も困難、手当てする医薬品もなく傷がむき出しのまま。傷口にうごめく蛆（うじ）を箸でつまみ取るだけ。蛆が動くたびに白い骨が見え目にしみた。生身の体に蛆がわき、取り除くだけの手当てである。また女子社員のYさん親子は火傷こそ見られなかったが大量に浴びた放射線の影響で急性白血病となり、十円玉くらいの紫の斑点が突然全身に現れ、頭髮はずぼと抜け、高熱が続き、歯茎からはドス黒い出血、激しい血便、苦しみ胸をかきむしって何の手当ても受けることなく逝った。人間最後の願いの言葉の一言も残さずの死だった。遺体は一体ずつ戸板に乗せ、裹

の空き地に薪を積み、お棺もなく茶毘に付した。人が焼けて行くと徐々に体が持ち上がる。それを完全な白骨になるまで薪を足し続けて静かな夜をすごした。その作業の間涙も出ず、恐怖感もなく、思考力停止状態でただ炎を見つめていた。骨壺など勿論なく、多分何かに包み、後日郊外の寺へ埋葬した。（市内の寺は全て焼失）菩提寺ではなかったかもしれない、宗旨が違えば戒名の文字も違うと聞く。非常時の死にはこのような埋葬もあったのである。特に鮮明に覚えているのは、若い女子事務員Oさんの死だ。「爆風で家がつぶれ、足が天井の梁と床の間に挿まれ助け出せず、刻々と炎が迫り強火の中に飲まれ、最後には『鋸で足を切って！』と叫ぶ娘の姿を泣く泣く火の中に置いて来た。あの娘の声が耳から離れない」とその母親が涙にむせびながら語られたことだ。

私の父も爆心地を歩いたことで大量に放射能を浴び、歯茎からの出血に悩んだ時期もあった。肋骨に刺さったガラス片の除去手術もせず、仕事一筋ですごし逝った。両親とも被爆者によくある心臓による死であった。

六十年以上たった今も被爆者たちは様々な症状に苦しむ生活を送る人が多い。各部位の癌の発生も普通の人より多く、私の友人の多くも何らかの癌の手術をうけ再発を気にしながら日々を送っている。被爆はその時の怪我だけではすまない。

死を迎えるその日まで体内に刻印された放射能との闘いがあるのだ。

最後に転居する八月末までの約二十日余りのことを記し筆を置くことにする。終戦の放送もあったこの間どう過ごしたか余り正確な記憶がない。ただ、筵（むしろ）をかぶせられ横たわっていた重傷者が「水ヲクダサイ」と求める叫びに、私は何故水を飲ませてあげなかったのかと強く後悔の念が残っている。当時火傷を負った人には死を早めるので、水を飲ませてはならないと厳しく言われていた。しかし、例えばそれが死へのお手伝いであったとしてもその叫びを聞くべきだったのではないかとの思いがいっぱいあるのだ。

あの死臭というか異臭の街、行方不明の親族を求めて歩く人々、土中から蒸し焼きになり膨れ上がった遺体をただただ無言で掘り出す人。

その中で七十年草木も生えないと言われた焼け跡で燃え残った枝に真つ赤な夾竹桃（きょうちくとう）の花が咲いたとき、私は「生命の神秘さ」を深く感じていた。

